

平成22年度 第2回木更津市史編集委員会 会議録

1. 会議名 平成22年度 第2回木更津市史編集委員会
2. 開催日時 平成22年9月22日(水) 午後1時30分～4時30分
3. 開催場所 木更津市立図書館 小会議室(2階)
4. 出席者 市史編集委員会委員 出席7名
金子 馨委員、橘田 昭雄委員、實形 裕介委員、藤平 量郎委員、野中 徹委員、
三浦 茂一委員、須田 昭平委員
教育委員会事務局7名
鶴岡教育部長、能城文化課長、戸倉主幹、浅野副主幹、石川主査
5. 議題及び公開又は非公開の別
議題1 調査研究等の進捗状況について(公開)
(非公開の理由)
6. 傍聴人 なし。

事務局(浅野副主幹) それでは、お待たせいたしました。ただいまより、第2回の木更津市史編集委員会の会議を開催いたします。本日の市史編集委員会は、梶山委員、高崎委員、それから永野委員のお三人が都合により欠席との連絡がございましたので、始まりに当たりましてご報告いたします。

会議につきましては、附属機関設置条例第6条第2項の規定により、委員の過半数の出席により成立しております。また、本日の会議は公開で行い、会議録の作成のため録音させていただきますので、併せてご了解願います。

それでは、初めに教育部長、鶴岡よりごあいさつ申し上げます。

事務局(浅野副主幹) それでは、はじめに橘田委員長よりご挨拶をいただきたいと存じます。

鶴岡部長 (鶴岡部長挨拶)

事務局(浅野副主幹) ありがとうございます。
次に橘田委員長より、ごあいさつをお願いいたします。

橘田委員長 (橘田委員長挨拶)

事務局(浅野副主幹) ありがとうございます。それでは、これからお手元の式次第にございますように、議事に入らせていただきたいと思います。議長の方は、委員長にお願いする規定となっておりますので、橘田先生、議長をよろしくお願ひいたし

ます。これからの議事進行を橘田委員長にお願いいたします。よろしくお願
いします。

橘田委員長

はい。分かりました。それでは議長を務めさせていただきます。ひとつよろ
しくお願いをいたします。それで、議題は、調査研究等の進捗状況をそれぞれ
各班ごとに発表していただき、その報告後、質疑応答ということで協議を進め
ていきたいと思ひます。

それでは、最初に自然班の方から藤平先生ご説明をお願いいたします。

藤平委員

はい。では、自然班の報告をいたします。自然班は、自然の調査が主であり
ますので、今年の大変な猛暑の中、調査はちょっと厳しいものがありました。
その甲斐もあり、この夏の調査では成果が現れました。その成果とは、動物班
の調査で木更津市に“モリアオガエル”が生息していることが判明しましたこ
とです。“モリアオガエル”というのはご存じかと思ひますけれども、伊豆で国
の天然記念物になっております。しかし、伊豆と同じように房総には大変多く
生息しており、ただ、伊豆のほうが見つかったので、伊豆の方国の天然記
念物になったということでありまして、よそにも負けないうらいいます。な
しかし、まさか木更津市にいるとは思わなかったのですが、馬来田地区でそれ
が発見されました。

橘田委員長

馬来田地区のどこにいたんですか。

藤平委員

馬来田地区の七曲、真里谷です。

藤平委員

それから、タゴカエルも確認しまして、この発見は、ちょっとしたニュース
になるような調査成果がありました。

橘田委員長

新発見ですか。

藤平委員

ええ。そうですね。タコガエルが木更津の馬来田地区で確認できたことは新
発見でした。それから、自然班では原稿も書こうということで、今月 15 日に、
事務局浅野副主幹の方へ全員が提出いたしました。しかし、やはり原稿はいつ
でも書けるなと思ひながら、実際に書いたものを、読者の立場で読み返してみ
たりすると、いろいろと欠陥が見えてきました。

橘田委員長

確かに、実際に文章にしてみるとそうかもしれませぬ。専門家にはいいが、
一般の人はどう感じるのか。

藤平委員 はい。ですから、毎月行っている班会議では、今後、一項目ずつ班員が熟読し、班内で検討を重ねなければならないと痛感しております。

橘田委員長 それから、自然班の場合、どうしても大事なのが写真になってきますね。

藤平委員 はい。写真の方は、約1年前から撮影しはじめておりますので、は何とか確保できるんじゃないかなと思います。

橘田委員長 はい。ありがとうございます。只今、自然班のご説明がありました。ご説明に対するご質問等はございませんか。

實形委員 自然班はだいぶ構成がシンプルになり、一般の読者が読むにはこれのほうがいいと、取っ掛かりやすいのでしょうね。

橘田委員長 とにかく一般向けですから、一般市民にどうしたら愛読していただくか。という点がポイントになります。事務局の方からは、何か質問はありませんか。

事務局（能城課長） 先ほど、藤平先生からお話ありましたとおり、皆さんの原稿が一通り文化課の方へ届いておりまして、着実に進めていただいているなということでちょっと安心はしております。しかしながら、やはりその写真と文章のレイアウトの難しさがわかりました。これから、最後のつめまでにはいろいろとレイアウトの変更等があるかと思いますが、少しずつ形が見えてきていますので、ほかの班もぜひそのように進めていただきたいと思います。

橘田委員長 それでは、自然班の方にご意見がなければ次の班に進んでいきます。それでは、原始古代の方に入ります。

事務局（浅野副主幹） はい。原始古代の方でございますけども、執筆者の方が、ほとんど市の職員ということもございまして、現実的にはなかなか全員が集まって打ち合わせをするというふうな状況でございせんし、それから、執筆について新たに何か調査をしなくちゃならないというふうなセクションでもございせんので、一応原稿執筆の方に取りかかってもらいたいというふうなことで、それぞれの委員さんにお任せしてあるというふうな状況でございます。おおい、実際に自然班で進めておりますような形の方へ、執筆の方も持って行って12月ぐらいにはというふうな、事務局の方としては算段しております。しかしながら、現実的には引き続きということで、執筆等よろしくというふうな状況でございま

す。ただ、何人かの方からは、非常に細かい話ですけれども、全体の図版組の関係を原則どういうふうにするかと。それによっては、各写真の大きさだとか、原稿の量とかですね、そういうものが決まるので、やみくもに書きたくないので、123文字で収めるなら123文字というふうなことにするためには、「どんな細かいことですか」などという質問もいただいております。引き続き、とりあえず、フリーな形で執筆を続けてくれというふうな形でお願いしているような状況でございます。具体的には事務局の方でもまた細かく把握している状況でございますが、おおむねそういう状況でございます。

橘田委員長 原始古代班の人たちは、現職でみんなお勤めの方が多いようだけれども、なかなか集まる機会は取りづらいのでしょうか。

事務局（浅野副主幹） 事務局としましても、近々集まる機会を持ち全体的な方向性や未確定な執筆担当の方を決定していきたいと思っております。

橘田委員長 原始古代のご説明が終わりました。はい、ご質問等ございませんでしょうか。

須田委員 これは要望なんですけれども、「小櫃川の流域の覇者」というところで、資料の6番目に「木更津黄金時代— 光り輝く金の鈴 —」というのは、これは金鈴塚古墳のことについて書いていただくということなんです。

事務局（浅野副主幹） はい、そうです。

須田委員 はい。それで、今、実は国立歴史民俗博物館と郷土博物館金のすずの方が共同研究という形で、国立歴史民俗博物館に出土品の一部の大刀を運び、非破壊検査し、金属のことも含めて、今、調査研究を三ヵ年計画で行っております。ですから、もしその研究の成果が出れば、『図説 木更津のあゆみ』の方へ、一部反映させていただければ有り難いのですが。

事務局（浅野副主幹） はい、そうですね。逆に、資料のご提供をよろしくお願ひしたいと思っております。

須田委員 それから、もう1点ですが、前回の編集委員会の際に、「木更津黄金時代」という言い回しは、勘違いされやすい、紛らわしいため不適切な表現として、再検討をお願いしたように記憶しておりますが、改善されないのでしょうか。

橘田委員長 そうでしたね。「木更津黄金時代」と、ここでは“金鈴塚古墳”のことを表

現しているのですが、読者には、この時代そのものが黄金期だったのかと勘違いされるので不適切じゃないかと、また「金鈴塚古墳」という言葉がでてきてないのはどうでしょうか。気になりますが、再検討できませんか。

事務局（浅野副主幹） はい。この件につきましては、また原始古代班の方へ持ち帰り、再検討したいと思います。

橘田委員長 それでは、よろしく申し上げます。

三浦委員 質問ですが、よろしいでしょうか。原始の概説の執筆者の欄が空白になっておりますが、これは、執筆者が未定ということでしょうか。

事務局（浅野副主幹） はい。そのとおりです。

實形委員 それでは、古代の方も空白になっておりますが、古代の概説の執筆者も未定ということでしょうか。原始古代は、この2ページで幾つか項目が立っているんですが、担当者が2人ないし3人なんですが、いずれは1人で書くのか、それともそれぞれ分担になるのでしょうか。

事務局（浅野副主幹） この点につきましても、まだ決まっておりませんので、今後決めていく点でございます。

實形委員 この自然史の方は、これは大勢で書かないといけないんですけど、それだけ詰まっているんですけど、こちらの歴史の方はたぶん大勢じゃない方が、まとめやすいかもしれないので、担当者が決まったほうが。その、1個しかないのは仕方ないと思うんですけど、何本かになっているのは、担当者が、主担当がいた方がいいんじゃないですか。それで、ちょっと足りないところを少しもう1人、2人がサポートするぐらいで。いずれ古代の方も分かれる、7本かどなたかがどれかってなるわけですよ。

事務局（浅野副主幹） はい。そうなることになると思います。

實形委員 ですから、やっぱり早くに執筆を始めた方がよろしいんじゃないですかね。

藤平委員 そうですね。執筆分担を早急に決めて、実際に執筆作業をされた方がよろしいかと私も思います。

橘田委員長 はい。原始古代の方は、そのほかご質問、ご意見ございますか。

實形委員 原始古代は全部、副題が付いているんですけど、それ以降、中世から急に付かなくなって。そこがちょっと統一感がなく、気になります。ん。もう少し他の時代のタイトルとバランスを取った方がいいのではないのでしょうか。

橘田委員長 そうですね。確かに副題が目立ちますね。

實形委員 それ以降はバラバラ感で、そのへんのバランスもまたいずれ。おそらくまた書き始めてタイトルを付けるとどんどん副題が付いてきたりするとは思うので、そのへんはあまり気にならなくなると思うんですが。

事務局（浅野副主幹） はい、わかりました。

橘田委員長 はい。どうぞ。ほかにご質問、ご意見ございますか。ないようであれば、その次の中世班へ進みますでしょうか。はい、中世の説明を事務局からお願いします。

事務局（戸倉主幹） 中世班につきましては、先生方が個別に筑波大学の図書館とか金沢文庫等に行って資料調査を進めています。それで、原稿執筆の準備を、今、進めているところです。以前の話では、先生方はなるべく8月の夏休みにある程度原稿を書きたいとおっしゃっていましたので、確認しておりませんが、おそらく各先生の中には原稿等ある程度は書かれている方がいると思います。

それから、8月27日橘田先生、滝川先生、盛本先生に市内の中世関係資料の現地調査を行いました。当日は、上烏田の西福寺、それから中烏田にあります、堂谷、曲がり坂にあります「かまくら道」と刻まれた道標の調査を行いました。午後は、大寺にあります宮本敬一さんのお宅の資料を調査しました。その後、高蔵寺を訪れたり、犬成の東泉寺を訪れて中世関係の資料調査を行いました。今回の調査成果としましては、例えば、上烏田の西福寺にあります阿弥陀如来立像がご本尊であるのですが、その台座の裏にあります墨書が、『木更津市史』の内容と若干違う『木更津市史』の記載に一部誤りがあったということが分かった点です。また、そのとき、ご住職が出していただいた古文書によりますと、そこに書いてあります墨書の「照光寺」というのは、現在の西福寺の前身であるということがそのとき分かりました。それから、そのほか江戸時代の信仰ですが、疱瘡除けに関係した聖徳太子の稚児像なんかを実見しました。後日、盛本先生からお手紙をいただいたのですが、中世の文書の中に、その堂谷のことが書かれた資料を見つけましたというご報告がありました。また、盛本先生から、市内の資料調査を引き続いてやりたいという話がありますので、

再度1日掛けて、資料調査をしたいと考えています。それから、今回の調査は先生方が全員集まっていたことも1つの目的だったんですけど、残念ながら2人の先生が急遽来れなかったもので、できたら年度内にもう一回、市内の市史係の悉皆調査的なものやってみたいなという、先生方のご都合がよければ一度やってみたいなと一応考えています。

橘田委員長 やはり現地を実際に見たうえで、執筆していただいた方がいいですからね。

事務局（戸倉主幹） そうですね。実際、現地を見ないとイメージがわからないということもあります。

それで、中世の先生方皆さんは執筆のプロというか、いつも原稿を書いている先生方たちなので、書き始めたら早いと思うんですけども、ちょっとまだ、先ほど申しましたように、原稿の執筆具合を確認していませんので、近々先生方に当たってみます。それで、予定どおり、今年度中には原稿を書いていただくような段取りで、進めたいと思います。

橘田委員長 はい、ありがとうございます。それでは、ご質問どうぞ。

三浦委員 これは、中世に関する質問でなくて恐縮ですが、この宮本栄一郎さんは、確か『上総義軍』ですか。こちらを書いていらっしゃるんですよね。

橘田委員長 そうですね。栄一郎さんが書かれております。

三浦委員 それで、上巻のみで下巻がないのですよね。

橘田委員長 そうですね。下巻は書かれておりません。

三浦委員 あの本は、ご自分の足で歩き、調査したものを書かれてありますが、恐らく、その関係のメモとか資料とか関係資料は残っているのでしょうかね。

事務局（戸倉主幹） はい。現在、宮本敬一さんが、自宅にある父親の栄一郎さんと祖父の寿吉さんの資料をご自分で整理されているので、たぶん敬一さんにお聞きすれば、資料は残っているはずですよ。

三浦委員 そうですね。では、また市史に関する資料の閲覧や資料調査など、例えば私が宮本先生のお宅にお訪ねして、その場でいろいろお話してこんなものはないかと、具体的にお願ひすれば見せていただけるのでしょうか。

事務局（戸倉主幹） はい、宮本さんのご都合が付けば、調査は可能だと思います。宮本さんのお宅には考古資料、歴史資料、民族資料、それから、近代、近現代の資料とか各時期そろって色々あり、ある程度、宮本さんが整理しているようです。ですから、これこれを見させてくださいと言えば資料を見ることは可能だと思います。

三浦委員 では、宮本さんの資料閲覧の件、事務局の方をお願いしたいのですが。

事務局（戸倉主幹） 宮本さんにはすぐ連絡取れますので、打診してみます。

橘田委員長 では、中世はご質問がなければ以上で終わって、次の近世に移っていきます。實形さん、お願いいたします。

實形委員 近世ですが、今年の2月8日に1回目の班会議を開きまして、6月12日に2回目の班会議を千葉県立中央博物館で開きました。それから、市内巡見を3月11日、8月14日、8月31日と3回開きました。また、巡見後、集まった先生方で班会議も開いたので、班会議を計5回開いています。こういった形で、市内巡見としましては、だいたい金田地区からぐるりと時計回りに回ったりしていたので、木更津出身ではない方もいますので、すべての地区は史跡を中心に、近世ではないですけど、原始古代から近現代までを含めて代表的なところをぐるりと回りました。要するに、書き始める前に回らなければ書けないですから、この3回でだいたい木更津全部の地区を回りましたし、旧木更津まちなかも歩きましたので、歩けば歩くほどなんかこのかつての中心地が何にもなくなっているのが分かりました。この市内巡見でだいたい感覚がつかめるような形になったので、これから本格的に書いてくださいということになっております。

それから、資料調査としましては5月7日に近現代と合同で金田公民館で調査をしまして、6月12日の午前中に千葉県文書館で木更津地域の関係資料、あと7月12日、18日も近現代と合同ですけれども、上根岸区有文書の調査を行いました。それから、個別にそれぞれの執筆者で調査も行っているところです。今後、幾つか調査の予定をしております。それから、構成班の検討の方ですが、空いているところを全部埋める形にしまして、若干手直しをしました。それで、最初の概説を書く人が決まっていなかったのですが、近世の木更津の研究の第一人者である筑紫敏夫先生にこの2ページで、木更津の近世の導入を簡潔にまとめていただくということで決定しました。筑紫敏夫先生にはそのほかに、業績を重ねられているテーマを4本書いていただくということで挙げております。前回の編集委員会で構成、執筆者が未定だった箇所、変更点を申しますと、まず「近世の概説」は筑紫先生、最初の1節目の「近世社会の成立」では、特に大きな変化はありません。

せん。それから「村々の生活」のところでは、宮本敬一さんと何回かお会いして執筆依頼をしておりましたが、芳しい返事はもらえなかったので、オーソドックスに「木更津の鎮守八劔八幡と坂東札所・高倉観音」というタイトルに変更し、代表的なものとして木更津の近世の寺社と生活のところに挙げるので、地域の関係の中で、歴史の中で話して、それで八劔八幡神社とこの高倉観音をクローズアップしつつ、近世の寺社について、ここで合体してまとめるようにします。生活なので、もうここに幾つか信仰とか生活文化に関するようなものを少し入れながらということで、1項目増えてしまいますが、私が書くことにしました。その他ですと「地域文化の開花」で寺子屋教育と至徳堂の話を4ページ書くのですが、川崎喜久男先生の息子さんが、執筆者にせっかくだから寺子屋教育のところをその息子さんの川崎史彦さんに書いてもらって、2ページ。そして至徳堂のところは石山さんに2ページ書いてもらいます。それで教育のところを4ページでまとめるという形にします。あとは、私が1つ増えた分を担当します。最後の4節目の「江戸幕府の終焉」ですけれど、幕末の旅日記ですね。ここを高橋覚さんに書いてもらいます。この旅日記というのは何かというと、千葉県文書館に十日市場村の佐久間鼎（さくまかなえ）の日記が残っているんです。『長崎港程記』といって、開港直前の安政6年に、長崎まで行ってるんです。横浜開港の直前に長崎まで行って、外国船とか見てきているので、それを面白おかしく書いてもらおうと。それで、高橋さんは以前、千葉県文書館にいたので、この資料も見ているということをお聞きしたので、高橋さんに執筆してもらうように変更しました。これで執筆分担と構成の概要を説明しました。しかし、これから実際に原稿を書き始めてから副題を付けたら、タイトルが少し変わったりというのがあると思います。夏の間で巡見が一通り終わりましたので、あとは手持ちの資料や図書館で資料収集したりすれば、書き始められます。近世班のスケジュールですと、これから書き始めて、年末年始のお休みで仕上げる予定です。ここで書けないと年度内は無理なので、一応、これで年内で書き始めて準備して、年末年始のお休みのときに仕上げるというのが、スケジュールになっております。近世は、あと構成案で少し「制札」の話とかも出たんですが、それだと中世とかぶるってしまいますので、「制札」については、触れないことにしました。このことは、8月に行われた役員会でも少しお話ししています。それで、最後の方に近世も「戊辰戦争」について触れたいという案も出たのですが、その辺はまた近現代のほうに組み込みながら、この構成で固まった1歩移行期の部分については近現代の方とこれからお話をし煮詰めて行く形にしたいと思っております。簡単ですけど、以上です。

橘田委員長

はい、分かりました。はい、近世の説明が終わりました。どうぞ、ご質問ご意見をお願いいたします。

三浦委員 単純な質問ですが、幕末旅日記、佐久間鼎ですが、これは何家文書にありますか。

實形委員 それは鳥飼家文書にあります。要するに佐久間さんが、鳥飼さんが親戚だからということですね。

三浦委員 はい。わかりました。ありがとうございます。

橘田委員長 はい。ほかにどうぞ。
では、私からよろしいでしょうか。この「戊辰戦争」については、幕末と明治のその辺のところは、近現代と話し合いをするのですね。

實形委員 はい。このあとに班会議を開いて、三浦先生に来ていただき、その過渡期の執筆分担のところはこの班会議で詰めたいと思います。

橘田委員長 詰めるかどうか。

實形委員 はい。近世の構成はこの案で行きたいと思っています。

橘田委員長 木更津の特色は幕末にもあることはあるんだからね。どっちが取り上げるにしても、木更津の特色が出せるように構成していただきたいですね。この筑紫さんが担当している4ページのこの打ち壊しは何ですか。この内容はどういうものなのですか。4ページも取ってありますね。

實形委員 幕末、これだけじゃないですよ。幕末でもっといろいろなことが書けるので、4ページになっています。それだけではないので、幕末の話をもう2ページにいろいろ取り入れてもらうということになります。

橘田委員長 それでは、近現代の戊辰戦争との兼ね合いというのは、そこで話し合うということですね。

實形委員 そうですね。このあとの展開を詰めなければいけないので、この幕末から、今度明治にかけての流れというのは当然調整しないといけないということになります。

橘田委員長 近世の三浦さんのご意見はいかがですか。

三浦委員 「戊辰戦争」ですか。幕府の終焉。今お話があったように、請西藩のどなたかが全国的にも非常に特徴的なケースがあるので、それがまさに終焉というような感じなので、千葉県全体、あるいは、房総の近代というようなことを考えると、やはり「戊辰戦争」というのが、1つの近代の始まりと言いますか、スタートに立つわけです。ですから、近代で扱ったほうがいいと思って、近代の方の話になってしまいます。中項目の『近代木更津の政治と経済』ところの「戊辰戦争と木更津」というところで、そんなふうなことから触れ始め、木更津地域を中心にした戊辰戦争の動きを書こうと思っていたわけですが、その中で、もちろん林忠崇の動きが1つの核となると考えます。

橘田委員長 そうですね。

三浦委員 そうすると、時代は別でも具体的にはつながっているわけですから。

橘田委員長 そうですよ。時の流れはつながっています。

三浦委員 それで、まさにそれを過渡期。幕末なわけで、1つまとまってるわけです。そうすると、僕が書くとなると、上から眺めることになります。私は、木更津出身ではありませんので、どうしても、房総とかそちらの視点からどうも書いてしまいそうなんです。ですから、地元目線からという点では、近世の方で筑紫さん、あるいは、高橋覚さんが書けるのではないかと思います。慶応4年と明治の始まりは、一緒ですから。これは、お二人のどちらかに執筆していただいた方が、いいんじゃないかと思います。しかし、そうすると時代の括りは、近世かというところやはり金世ではなくて、近代であると考えます。

橘田委員長 やはり一般的にも、明治の始まりは近世では近代の始まりでもありますね。

三浦委員 ですから、今の僕の考えは、この「戊辰戦争後、木更津」は僕が執筆することになっていますが、構成はこのままにして筑紫さんもしくは高橋覚さんに執筆分担を変更してはいかがと考えております。近代に入ってもらって、つまり、近世だから近世の枠の中だけで書くんじゃなくて、近代のほうにも出張っていただいて書いてもらって。ただ、②以降のつながりというのがありますから、近世も踏まえて近代の中で収まりよいうように、地域の観点からきちんと書いてもらえればいいんじゃないかと、いいスタートになるんじゃないかと思います。

橘田委員長 はい。他に、どうぞ。では、近世も着々と実現しつつあるところから、このような内容でひとつまとめてみたいと思います。

それでは、次に、近現代の説明をお願いします。

三浦委員

近現代ですが、前回の編集委員会からほとんど変わっておりませんで、今申した「戊申戦争後、木更津が近世との関係で状況が動くかも分からん」というのがあります。それ以外にはあまりありませんで、班会議も何回か開きましたが、資料4ページの「戦後、木更津の変貌」というところですが、これは本委員会で幾つか条件を持っていただいた議論ですけれども、今のところは、「占領直後」のいうのは、“占領期”というやや幅を持たせている、そういうふうに変更しました。

橘田委員長

占領期ですね。

三浦委員

はい。班会議にて「占領期の木更津」に変更しました。それから、この「大型プロジェクトの実現」というので、このようなサブタイトルが付いていますが、後半の節のほうに持ってきて、後半の中項目『戦後の社会と文化』の「公害の発生」というのがあります。「公害危害の発生」を前に持って行って、代わりに「プロジェクトの実現」をあとに持ってきて、交換したらどうかというような意見が出ておりまして、変更したいと考えますが、委員の皆さんのご意見もお伺いしたいところです。

それから、この構成内容については、上杉さんが途中から参加されたのですが、原稿はもう一番早く出て来ておりまして、もちろん完成原稿ではないのですが、第一次原稿としてですが。

三浦委員

それから、班としての資料調査を先ほど近世の方でも「上根岸区有文書」を一緒に調査したお話がありましたが、それ以外に、現在まだ進行中なんですけど、岩根郵便局の前局長の安藤小平さんの蔵を調査しております。これは能城課長さんにお世話になり、蔵を開けていただき、現在もまだ資料整理が進行中です。やはり岩根村の大地主になる家柄でして、農協の理事長をやっておられたという関係で大活躍した人で、その功績が大きな石碑に刻まれご自宅に建立しております。ですから、恐らく、こんなものがあるだろうというので、狙いを付けて調べたわけですが、土地集積も重んじるとか、それから、いろいろな漢籍ですね。やはりこういう明治期に活躍する人はかなり漢学ですね。全部は整理すると、これまた非常に大変なので、少し選ばせてもらって抜き出した目録です。今少し、年内には仕上げたいと思っておりますが、これは割合に近現代班の調査研究員ではなくて、市史編集事業のボランティアで名前を登録している方たちにも2～3人協力をしていただいて、岩根公民館に借り出して、目録作成を進行中です。

それから、その前に、これはもう終わったんですが、橘田委員長と行き、西上総文化会 理事長の藤浪さんのお宅にある「重城和三家」の資料ですね。「重城和三家」の

扱い、重城保の流れの中の本家の流れの方ですが、そのお宅のものが、西上総文化会理事長の藤浪さんに寄贈されたものがあり、それを全部借り出して、目録作成をしました。資料点数は、100点ないんですけども、でも、割合貴重なものがあり、主にはやはり重城保さんよりも、その息子さんに当たる、直接の息子さんじゃないのですが、長女のお婿さん、巖（イワオ）さんですね。重城の3の資料があるんですね。重城巖さんもいろいろ書き残してまして、明治10代ぐらいのメモとか、織本東岳の下に留学するんです。明治のころに。それで、2～3人ぐらいの内弟子がいるんです。織本家に。そういうようなことが書いてありました。

それから、木更津第一小学校の資料目録の作成をしました。目録を見れば分かりますけれども、木更津の第一小学校が明治11年かに、非常に近代的な建築をつくって、最近、改築もされて記念の式典などに行ったわけですが、あのときも始まりです。明治11年のときに、県や郡から、郡長や、それから県の教育課長に当たる人が出てきて、開館式ですね。開校式にお祝いの言葉を述べるんですね。そのお祝いの言葉の式辞の原稿があるんですね。だから、これをもうそっくり写真に撮ると、非常にいい状態なんです。明治大正期の社会と文化の遺産。

この他、調査したのは、袖ヶ浦市郷土博物館とか、ここもなかなか面白い人なんです。先ほど名前が出た、佐久間家、佐久間帯刀、十日市場ですね。この文書が大量に袖ヶ浦博物館に入っています。だから、これは1回ではちょっと終わらないです。もう1つは吉堀家です。町長をやった方もいますが、市長ですか、町長ですか。

橘田委員長 市長ですね。

三浦委員 吉堀家文書は、特に教育関係です。これももう少し調査したいところです。その他は、先ほどの重城和三家の目録を作成したのですが、その作成した目録を、現在の和三家の奥さんが九十幾つになるのですが、持っていきましたら、「まだありましたよ」と言って、重城保の日記が1冊出てきたんです。1冊というのは、どうも、それで、今日あそこに行って見てきたんですけど、郷土史と言って、見てもらったんです。こちらに集まっているんです。大量にね。やっぱり明治45年のやつがあるんですよ。それで、亡くなった重城和三さんが、だいたい活字にしてありますから、あれを見れば分かるんですが、原本はどうなっているかといつて、前から気にしていたんですが、それで、たまたまそれが、この和三さんの家から出てきたんです。

橘田委員長 それは、原本ですか。

三浦委員 はい。原本です。それで、大部分は良造さんに言われて図書館に渡したけれども、これは記念として残すというように、和三さんが書いたわけです。それから、ここ

も今日見たのですが、この図書館に「重城家関係文書」という資料がありまして、まだ未整理だと言うんです。封筒に入れられたりして、かなり途中まで整理しているんですが、その後、目録をつくれなくて、今でもそのままになっているというお話でしたので、これも市史として調査をし、目録をつくる必要があると思います。それから、あと気になりますのは、2つほどありますが、1つは、伊藤勇吉さんという方ですね。戦前の木更津町長さんですが、こちらにこの軍の施設を持ってくるのに、尽力しているという方の力作です。その家がまだそのままあるかどうか。こちらの家も調査したいものです。

それともう1つは、請西の林家の資料です。現在、その林家の資料の一部を、郷土博物館金のすずで資料整理をしていらっしゃるんです。おそらく、林勲さんの日記もあるはずだということで、拝見させていただこうと閲覧をお願いしてあるんですけども。どうも、金のすずで預かっている中には入ってないんです。実は、林勲さんの日記は、ちょうど木更津第一中学校に入学した頃の大正初期から書き始め、亡くなるまでであるそうです。ですから、何十冊もあるんです。大量に。

橘田委員長 大正ですね。

三浦委員 大正の中学生の日記なんです。これは、大変貴重な資料となります。それで、是非、この林勲さんの日記などをご自宅へ伺い調査したいというふうに思っています。これは、今度の図説「木更津のあゆみ」には間に合わないかもしれないけれども、市制 80 周年記念には間に合うでしょう。

橘田委員長 市制 80 周年ですよ。80 周年を念頭に置き、資料が散逸する前にそういうものはどんどん、どんどん発掘して残しておかないとなくなってしまいますからね。ありがとうございました。

三浦委員 これで以上です。

橘田委員長 近現代のお話を伺いました。それぞれ調査研究を進めてくださっておりまして、資料整理の方も進めてくださっているようでございます。かなり近現代というのは一番新しいところですから、木更津の成り立ちとか重々発展するところ途上の歴史を書いていることになるわけでございます。

はい、それでは、ご質問、ご意見をお願いします。

實形委員 近現代ですと、「嶺田楓江」について表にでてきませんが、この点はどのようにお考えでしょうか。やはり近現代の方で触れた方がよろしいかと思えます。

三浦委員 そうですね。私も、「嶺田楓江」について触れたいと思っております。私としては、「重城堡」のところで触れようと考えております。現在、「重城堡の生涯」というふうに仮にテーマ出してありますが、「重城堡」は、幕末から活動していますし、「嶺田風江」とも密接に連絡するというかな。むしろ、師匠として扱っていますが、師匠だけではないですね。むしろ仲間という感じもありました。なかなか面白いので、「嶺田楓江」についてはここで触れたいと思っております。

橘田委員長 では、タイトルの方も「重城堡の生涯と嶺田楓江」とかに変更することになるのでしょうか。

三浦委員 そうですね。タイトルも内容にあうようにこれから、変更することになると思います。

橘田委員長 それでは、他にご質問、ご意見をどうぞ。

【

事務局（戸倉主幹） 以前、三浦先生の資料をお渡ししてあると思うんですけど、これが、明治大正っていうの、社会と文化の「関東大震災の被害」。ここで、先ほどお話ししました宮本さんのお宅にありました、おじいさんの日記の中に、関東大震災当日の様子が克明に書かれてありまして、その中で、夕方4時すぎに横須賀の海軍省から公文書の切れ端が飛んできたというのがあます。そのビラ自体の本物も残っているので、そのことは、池田先生はご存じではないですか。

三浦委員 池田先生には、まだお話ししておりません。

事務局（戸倉主幹） そうしましたら、事務局の方からこの資料のことをお知らせいたします。この資料を『図説 木更津のあゆみ』で使うかどうかは、池田先生のご判断にお任せいたしますが。

三浦委員 そうですね。では、事務局の方から池田先生に情報提供をお願いいたします。

橘田委員長 だんだん、だんだん関東大震災も忘れられてしまうので、現代に伝えるための良い資料となりそうですね。それでは、他にご質問ありますか。

 では、私から1点確認ですが、「花街木更津－芸妓の「はね銭」値上げ反対運動－」というタイトル名のことはどうなりましたか。

三浦委員 中テーマ「戦争の時代と軍都木更津」の「花街木更津－芸妓の「はね銭」値上

げ反対運動」につきましては、当時の新聞記事を中心にして書くのですが、以前からの編集委員会の中で「花街木更津」というふうな見出しの「花街」という表現が適切かどうかと、一部の委員の方からご意見をいただきました。その後、近現代班で再検討した結果、新聞記事にも掲載されているし、誤った表現ではないので、この「花街」という表現をテーマに使用しても差し支えないだろうというのが、班全員一致の意見です。

橘田委員長 そうですか。近世班では、このまま「花街」を使用するという結果がでたわけですね。

三浦委員 はい。この事件は、『千葉県警察史』でも掲載されており、その当時、ちょっとした話題となっていたようですね。

橘田委員長 『千葉県警察史』にも、取り上げられているのですか。

三浦委員 はい。この事件は、当時ではまだ珍しい「女性の積極性」と言いますか、「自主性」があり、生きるための「労働運動」であったのです。そういう視点で触れるつもりです。ですから、花街云々という視点から記載するつもりはありません。そういう動きが、戦争協力にも出てくるわけです。「国防婦人会」の活動ですね。

橘田委員長 国防婦人会運動ですか。

三浦委員 木更津の女性が自立しているという。そういう視点で触れます。この女性運動は、江戸、東京とも近いっていうのも関係するのではないかと推測できます。

橘田委員長 「花街木更津」っていうのが、ひところはやはり随分と言われ、あまりイメージがよろしくないという編集委員からご意見がでておりましたが、三浦委員のご説明の視点からでしたら、問題ないようですね。

須田委員 以前より編集委員会で、聞かれて私が申し上げたのは、要するに、「花街木更津」という言葉が適切かどうかという、それだけの話で、中身的には全然問題ないと思いますので、ぜひ取り上げていただきたいというふうに思いますけど、ただ、「花街木更津」という木更津市史の中にそういう言葉を入れるのが適切かどうか判断がつかないというふうに申し上げました。

橘田委員長 そうですか。はい、では他に何かございましたら、ご質問、ご意見どうぞ。ご意見ないようであれば、民俗班のご説明をお願いします。

民俗班の方ですけれども、まだ皆さんで一堂に会する機会がなかなかないまま、まだ、そのままになっている状態です。それで、一応執筆者の方と項目は、これで一段落してまとめましたので引き続き、この体制で進めたいと思います。それと、皆さんから指摘されたこの項目の検討、2・3あったわけで、それは重々承知しております。まあ、書いている過程において、何かいい題名があればと。木更津色を出したタイトルにしてくれると思います。

それから、事務局の方で細かいことはこれから申し上げますけれども、話者（わしゃ）を一堂に集めて、それは主に桜井地区の方ですが、採訪する予定で、これが今月30日を予定しております。今のところ聞き取り調査の予定をしております。ただ、問題がちょっとあるんですけれども、いわゆる「くらしと生業」というのがありますけど、その生業活動というのがあるわけですけれども、ほかの市町村を見ると、いわゆる生業と言いますと、農業とか漁業、林業、これが主なんですよね。袖ヶ浦市にしろ、君津市にしろ、富津市にしろ。ところが、木更津はこれちょっと、商業ですよね。商業がいわゆる生産活動にあたるかどうかということ。例えば、諸職という項目がありますけれども、諸職にしても、ものをつくったら、鍛冶屋さんとか何とか屋さんとか、ものをつくる。ところが、商業となると、例えば、乾物屋とか佃屋さんとか、そういう立派に仕事として成立して、この地域の中心になっているんですよね。それを少し大きく言うべきか、ちょっとご検討に。それは、ものを生産するものはないけれども、入れた方がいいんじゃないかということがあれば、考えておきたいと思います。また、委員のみなさんのご意見をいただきたいと思います。

それと、もう1つは、近現代の方で「戦後、木更津の変貌」、その4、「のり養殖技術の発展」というテーマがありますが、これは当然、民俗としても、のり養殖は取り上げなければいけないわけです。どういうふうにして、こっちも取り上げようかと考えているわけですけれども、例えば、のりができるまでということ、細かく順序を並べても、今回はそんなことをやると、すぐ尽きてしまう。だから、大きな展開を中心に書いていったということに。そうすると、こちらは技術ですけれども、重複してしまうわけで、この執筆担当は森脇先生ですか。ちょっとお話してみたいと思います。森脇先生もこれは1つ、ちょっと展開となると、技術もちょっと、当然入ってくるわけですから、それをどっちに入れるかということで。それから、農業にしろ、みんなこう、順序ができるか、順序がありますけれども、それを細かく書いても、これはできないから、大きく展開ということを書いておいていたということ、その前はこうであったというようなことしかできないと思いますけれども、ということで、第1回の私たちの採訪が桜井で行われていると。

それと、もう1つは、結局、漁業にしても今、桜井とか畑沢とかそういうとこ

ろはもうやっておりますよね。ただ、やっているのは、金田、中島ですか。いわゆる、あのへんだけですけれども、過去のことですから、いいですけれども、一応、ちょっと商業の方についてご意見いただければ、こっちも大変助かると思っています。よろしくお願ひします。

橘田委員長 はい。それでは、民俗の方でご意見、ご質問はありませんか。

事務局（戸倉主幹） 補足があります。聞き取り調査を今月 30 日に桜井地区の老人の方、十数名に集まってお聞きいただきまして、主に、この項目にあります、「くらしと生業」と「信仰と行事」にかかわることで、野中先生、田村先生、高橋克先生、地引先生に来ていただきまして、聞き取り調査を実施します。それから、そのときに併せて古い写真がないかということも一応頼んでありますので、場合によっては、民俗中心になると思いますけど、古い写真の方も何枚か集まると思います。

それから、埋め立て以前の様子を知る地元のお年寄りが 70～80 代なので、おそらくこの時期を逃してしまうと、その当時の様子などもあと 4～5 年も経ってしまえば、もうわからなくなるというような状態です。ですから、できればこの機会が最後だと思うので、桜井のほか小浜など、時間的な制約があるのですが、小浜、あるいは畑沢の方も、やれるのでしたら聞き取り調査を行ったほうがいいかなとは思っています。

橘田委員長 確かに、時間的な制約がありますね。

事務局（戸倉主幹） はい。聞き取り調査をしましても、今回の図録には、その成果を、一応図録なので、資料としては、大部分は今後これから計画をしていかなければいけないむしろの本編のほうの資料に結構入ってくると思います。まあ、そういうわけで、一応、桜井地区での聞き取り調査は一応段取り付けましたので、30 日に行きます。以上です。

野中委員 それから、追加説明ですが、木更津市の民俗調査に関しては、一番新しいのは中島地区を中心としたということで、高崎先生がおやりになっております。あれは、平成何年だったかな、平成 4 年、5 年ですかね、その成果が刊行されていると思います。それで、僕もその調査に引っ張り出されて、そのとき調査に携わりましたので、多少記憶に残っておりますけども、桜井地区の方は全然ノータッチだったので、今回、調査を実施することになりました。

橘田委員長 はい。それでは、民俗関係についてご質問、ご意見をお願いします。

實形委員 先ほど、商業はやはり木更津の特色なので、ぜひ生業のところで組み込んでいただいて、よろしいのではないのでしょうか。

橘田委員長 取り上げた方がですね。

實形委員 はい。いいんじゃないでしょうか。

野中委員 はい、よろしければ、商業を組み込んでいきたいと思います。もうだんだんところどころ寂れていますが、一時、農業とか漁業よりも栄えてたのが商業ということになりますからね。随分、世の中、種類があるとか、職業で出すと、そのような方向で、じゃ、よろしければ、ちょっとおかしいんじゃないかと言われるとちょっと困ると思いますけれども、一応今までのあれを見ていると、やはり生産活動に充実した諸職ということで取り上げておりますから、それも1つは生産活動だと思いますから、よろしければそれで原稿執筆等進めていきたいと思います。

橘田委員長 はい、分かりました。はい。それでは、その他ご質問などいかがですか。

實形委員 あと、中島のりというか、漁業をやっていますけど、だいぶその10年前よりはちょっとは進歩してきているので、いや相当進歩してきております。のりとかも今では、ほとんど陸採になってきているので、陸でうつとかと一緒に、陸で網に種付けしているので、そういうのとか、写真はこれから今、撮っておいたほうがいいかもしれないですよ。のりの様子とかは、ちょうどこれから最盛期になってきますので。そういうのは、民俗の方に入れちゃって、歴史の方は森脇さんで、うまく書いてもらうような形にすればいいと思います。

橘田委員長 どうですか。あと民俗関係でご質問はありませんか。それではいろいろと各班からいろいろ班の状況をご説明いただいて、大変ありがとうございました。

事務局（能城課長） ちょっと確認させてもらってよろしいですか。

橘田委員長 はい、どうぞ。

事務局（能城課長） 近世の方ですね。5月、6月、8月、9月とだいぶ調整をかけてきているのですが、ここで最終まとめるようなことで理解してよろしいですか。

實形委員 はい。よろしいです。

事務局（能城課長） それで、あと、じゃあ、残るところはさっきの幕末の木更津と、あと、近現代の方の、そこの戊申戦争絡みのところを調整するような、それでいけるということで大丈夫ですね。

實形委員 はい。

事務局（能城課長） はい、分かりました。

橘田委員長 はい、どうぞ。

事務局（浅野副主幹） この、実は、話的には近現代だとか、それから民俗関係の方のという思惑がございまして、事務局の一存で9月1日に市の広報誌に載せまして、あなたのおうちの古い写真をご提供くださいということで、今、ぽつぽつご提供いただいておりますので、すぐに何かこう、使えるようなものはなかなかないのですが、一応ある程度、こちらのほうで見させていただいて、この項目に合う写真がもし出てくれば、その都度、今度、個別にご連絡して、こういう写真を手に入れましたと。ご連絡しますというふうな形でご連絡していきたいなと思っております。

橘田委員長 そうですね。

事務局（浅野副主幹） はい。逆にまた、ワンポイントであまり請求されちゃうと、ちょっと応用できないんですけど、一応、ぽつぽつ集まり始めますので、新たな形でまた各執筆でお世話になる方々に、この写真がありますよということで提供していきたいと思っておりますので、ちょっと頭の片隅に止めておいていただければと思いますので、ちょっと行き詰まるようであれば、ご電話いただければこんな関係の写真はないですか。などにご相談いただければと思います。

橘田委員長 そうですよ。はい。ありがとうございます。はい、他にございますか。

それでは、それぞれ執筆を始めているところ、これからいろいろとつかかるところ、これから勝負だというような感じも受けます。それで、各班の中で執筆者が、不確定なところも若干ありますし、今、こちらの中世やそれから原始古代のほうでも話題になりましたが、1本に絞るとか絞らないとか、3人でこれはどうして書くのかとかご意見もありました。実際には、いろいろと執筆者が一番ご苦労なすって、今からまとめていただくわけでございますけれども、執筆者について、今後、ご病気でもない限りは、これでこのまま突き進んでいただければ、誠に有り難いわけでございます。

今回のこの編集委員会の中で、何か新しくこのところがこうだとか何とか

ってというようなひっくるめて、執筆者について忌憚のないご意見がございましたら、お願いをしたいと思います。うちの班はもうがっちりして、もうすぐにも筆が運ばれるようであれば誠に有り難いのです。

近世班、何か補足が何かありましたらお願いしたいのですが。

實形委員

近世は、とりあえず今、手持ちで書けるところでまずやってみようということになっていきます。あとは、本格的な趣旨に向けての調査というのはどこまでできるかまた、ちょっとこのへんは難しいところで、どう進めるかはちょっとまた考えていきたいと思っています。

あと、全体の構成なんですけど、この最初の「木更津の紹介」のところはまた、忘れないようにしておいてください。この冒頭の4ページは、事務局でやることになっているので、最初で大事なところになりますので、よろしく願いします。

事務局（能城課長）

それは今、担当の浅野が準備しています。

實形委員

はい。そして、少しそろってくると、こういうのもイメージに助けになるので、なんかこういうのができましたっていうので、最初の「木更津の紹介」の原稿が少しもらえると、私たちが書くときにイメージでしやすいですし、現在の木更津のイメージがちゃんと入った上でまた近世とか書くと、また違ってくると思いますので。

橘田委員長

こちらの方も事務局の方で、考えていますね。進んでいますか。

事務局（能城課長）

最初の木更津の紹介。いわゆる一般的なご説明ですね。

橘田委員長

一般的な木更津の紹介の部分は、多少なり書き始めているのですね。

事務局（浅野副主幹）

はい。

實形委員

では、だいぶ事務局の浅野さんがやっているようでしたら、できる限りでも既に下書きを書き上げているところがありましたら、データのにもいいですけど、またいただければと思います。

事務局（浅野副主幹）

はい。まだまだ仕上がってはおりませんので、今後、努めて参りたいと思います。

橘田委員長

はい。なるほどね。そういうような状況だそうでございますので、事務局の方よろしくお願いします。

それから、この前の役員会の際、話題になりました近世の構成の修正案および執筆員の件は、何か調整ができましたか。

實形委員

はい。これで、このあと近世の班会議を開きまして、また三浦先生と近現代の戊辰戦争のところもありますので、併せてこの合同会議で確定させるという形にしたいと思います。

橘田委員長

はい、分かりました。

会議時間も長時間になってまいりましたが、他にご意見ありませんか。

このあと、何か近世班のまた班会議があるそうでございますけれども、昨年度来、何回も編集会議をしていただいて本当にありがとうございました。ほぼ煮詰まってきたという感じがいたしますので、年末年始か、暮れに向けて一生懸命やりますというようなご発言もございました。なお、調査を進めているところもあるわけでございますけれども、そちらの方も時間がなかなかうまく取れないようですが、時間を見ながらより調査は深めていただければいいなあなんてちょっとそんな感じを持ちました。一層のご協力とご支援をお願いをしたいと思います。

それでは、事務局の浅野さん、今後の予定等何かございますか。

事務局（浅野副主幹）

それでは、着席して説明させていただきます。

資料2というふうなのでお示ししてございます。これは確認でございます。新たにご協議いただくというふうなことではないことですが、一応この4月から全体計画の変更ございませんので、編集委員会としてはこういう形で進めていきたいというふうな状況でございます。

それで、執筆スケジュールのところです。こちらの方が、実際に今、一般的に進めていただいている原稿執筆にかかる調査研究については、一応12月末をめどに終えていただくというふうなことで、担当をお願いしたいということでございます。それで、形的には1月から本格的な執筆活動に専念していただくということです。調査研究の方に手を取られて、原稿執筆ができないというふうな自体にならないように、ご配慮願いたいということでございます。

それから、次の第4回、最終の3月の編集委員会のときまでには、若干の原稿の粗原稿みたいなものをご用意できたらなあと、事務局では考えております。それで、その粗原稿をあらかじめ、この編集委員会のあとでもなんだろうけれども、お示しして、平成23年度から今度、編集委員会がどちら

かという、回収作業みたいなところが少し強まってくるのかなというふうなことを考えておりました、それに備えてということで、2月末までに各班ごとの2月末、3月中旬という2つの欄がございますけれども、下段の方の2月末までに全体的な構成とか記述内容等を調整した原稿を、各班長さんの方で取りまとめていただいて、事務局に提出していただくというふうな段取りをしていただくと、3月中にそれを、どういう形で次年度以降の編集委員会にご提示申し上げるかということもあるんですけども、一応、事務局のほうで取りまとめて、次回以降の検討のための下準備を行いたいというふうなことを考えております。

それに伴いまして、その上段の部分ですけれども、一応部内の方で、いつというふうなことを、こちらの事務局の方では考えておらないですけども、若干の班内での調整みたいなことも自然班をちょっとお手伝いさせてもらっていると感じておりますので、1月末とか2月中ごろとか、2月頭とかいうふうな形で各班で設定していただいて、1回原稿を集めていただければどうか。班内で検討していただいて、下段の2月末に向けて進めていただければというふうに考えております。

それから、なかなか各班全体が集まるというふうなわけにいきませんので、以上のような話を事務局の方から各執筆委員それぞれにちょっと班長さんを通じてのお話とは別に、執筆の方の力点を移してくださいというふうなことで、お願いのお手紙でも出した方がいいのかななんて考えておるところでございます。おおむねの流れで流れますということです。それで、来年度、平成23年度になりますと、全体編集委員会で、回収の方の、回収に近いような内容を会議の形の方に作業の方に移っていくというふうなことを考えております。一応、この考えでおります。委員の皆様には何かこうした方がいいんじゃないかなというご意見があれば、ちょっとまたお教えいただければと思います。

橘田委員長

はい、ありがとうございました。

事務局の浅野副主幹の方から、今後の日程的と申しますか、今後の進行状況についてのご説明がありました。平成22年度の3月下旬、④編集会議（執筆状況報告など）、そういった進捗状況を確認するといいますか、3月下旬のときの会議でやりたいと思います。そのためには、それをやるにはそれなりに諸準備が必要になってくるのでございましょう。ひとつ、3月下旬といっても、すぐやってくるなあなんてことも考えられますけれども、よろしく願いをいたします。

それで、平成23年度の計画も一応そこにございます。平成23年度の2月というと、年度末になるわけでございますが、2月末過ぎでしょうか。1月

末か2月頭かも、そのへんのところで原稿を取りまとめて持ち寄って検討をするということになりますが、1年なんていうのは慌ただしく過ぎていってしまうわけですが、このスケジュールにしたがって、各班ともご努力いただきますと大変有り難いなあなんて思いながら、今、この表を見ております。何かこの表について、ご意見あったらどうぞお願いいたします。

事務局（浅野副主幹） 平成 23 年度以降の原稿の読み合わせみたいな形で事が進んでいくと思えますけれども、そのときに、実際にはどういう形で提示するのがよしいのかなあなんて、実は考えておりました、従来でしたら、例えば、原稿用紙に原稿は原稿だけ、写真は写真だけということで、別枠にして論議していただくものだと思うのですけれども、今回、ちょっとビジュアルというふうな観点があるとすると、ちょっと写真とかそういうふうなものの配置とかそういうイメージを含めてですね。ちょっと論議したほうがいいのかあなんていう気もするもので、例えば、印刷するには直接出せませんので、版組みはしてもらえませんが、例えば、こちらの方で仮にワードのようなもので、版組みして、おおむねこんな感じですよ。例えば、この文章と絵の関係はこんな感じですよというふうなものを示していただいてチェックした方がいいのかあなんていろいろ考えておりました、そのことを考えると、2月末ぐらいにほとんどの原稿が、要するにこれが本来、原稿になるんですけども、おおむねこんな原稿が欲しいなあなんていうふうな形のものがないかと、こちらの事務局の方でつくれるかなあなんてことも考えておるものです。

橘田委員長

はい。確かに今回は、文章は文章、写真は写真がでは、ちょっとイメージが付きにくいですね。一番大事なのはそういったイメージで見ていくことになろうと思いますので、この平成 23 年5月下旬で、写真、図版などのデータの最終締め切りとありますけれども、これもできるだけ早い方がいいということになるかな。

事務局（浅野副主幹）

そうですね。ただ、こちらの方は自然班でもやらせてもらっているんですけども、ここにこういう趣旨の写真が、これぐらいのスペースで入るんですよというのは、たぶんイメージできればいいと思うんです。例えば、原稿の文字数の方を優先すると、どう考えたって2センチ四方しかスペースがないのに、イメージとして、サービス版ぐらいのを考えているなんていうので折り合いませんので。ですから、サービス版まで持っていくのならば、原稿はもう 100 文字ぐらい削らなくちゃいけないとかいうふうなところを、1回示したほうがいいのかあなんて思いました。ちょっと、このとりあえずのところは、この写真図版の現物は、これぐらいのスペースを考えているんだというのだけ、L版だとか、サービス版あればいいですよということがわかれ

ばこれで版組みができますので。

事務局（能城課長） 　　ただ、浅野副主幹。これ、本当に使う写真を含めての締め切り期限です。そういう約束でこれまで、話を進めているので一応その期間までに仕上げるというのが大前提なんです。

事務局（浅野副主幹） 　　いやいや、2月末とか4月の段階にいただける原稿ですね。年度内にいただく原稿のときには固まっておれば、それで構わないと自分は理解しています。

事務局（能城課長） 　　いや。前の編集委員会で、そういうことに決めはずです。どうしても、そういう写真があるんだけど、ま、天候の加減で写真が上手く撮れなかったとか、そういう差し替えはいいですよということを前提にしているはずです。

事務局（浅野副主幹） 　　では、一応、写真と原稿の方は完全の形で5月までに提出していただくということでお願いします。それで、この2月の原稿締切りのときには、そういう手順でも構わないということでご理解ください。

事務局（能城課長） 　　いや、2月の段階でも写真や原稿は確定してもらわないと、締切期限がずぶずぶになっちゃうから、そこで2月の時点で1回締め切りましょうという話になっています。

橘田委員長 　　ですから、2月の締め切りのときに完全原稿に近いものを提出してもらうことが、一番ベストだということですね。それが出てきて、「あー、この写真って、こういう説明で」っていうような協議をすることになっていかないと、なかなかね、次に進んで行かないのではないのでしょうかね。

事務局（浅野副主幹） 　　5月以降については決まった写真と活字の入ったので、編集委員の皆さんに検討していただくという予定で参りたいと思います。

橘田委員長 　　はい。そうですね。

事務局（浅野副主幹） 　　平成23年度の第1回目の編集委員会の計画のところでは、そうなるようにということで進めていくということでお願いします。

實形委員 　　本当に原稿提出のときに、掲載写真のキャプションを出してもらえればいいのです。4点だったら4つのキャプション付けてもらって、例えば、「林忠崇肖像」って入っていればそれでいいわけですよ。その解説まではでき

ていないかもしれないんですけど、それはスペースで、それで四角い枠を取
るということですよね。とりあえずは、最初はたぶん3つ載せるんなら3つ
で均等に枠を取ってみて、あとはもうちょっと構成がそれから進んでいくと
いうことです。それで、撮りきれない写真があとからどんどん、どんどん入
ってくるようにまたなるということですよ。

橘田委員長

原稿を書く人はやっぱりそういった写真がやっぱりイメージで結構配置さ
れながら文章とかこうやってこうやってまとめていくんだろうと思います。

實形委員

原稿提出のときには、だから、最低でもキャプションは出してくれないと
いけませんね。

橘田委員長

そうですね。

實形委員

載せる写真のキャプションで、何も検討が付かないで4つも載せるのでは
困るので、とりあえずキャプションをなんぼなんぼでいいので、何か載っか
るのを付いていけばいいので4つ、そうすると何の写真が載るかは分かりま
すので。

橘田委員長

はい。では、そんなようなことで、今後、資料の方もどんどん、どんどん
精選していかなきゃいけないということで、次の市史のための資料収集もあ
るのしょうから、今回の資料、これはまた次の段階の資料というようなこ
とで選り分けをしながら、収集の方は収集していただいて残していくとい
うようお願いをしたいと思います。

實形委員

もう1つ、とりあえず12月までで執筆のための調査は終了させるとい
うことで、一応ほかの執筆の先生方にもじゃんじゃん来ていいのか、それとも
ある程度計画を持って、その必要な中でということですよ。このへんを、
じゃあ、意識してもらおうということで、もうこれで資料調査はひと段落を
つけましょうということですよ。

事務局（浅野副主幹）

はい。そのとおりでございます。
それから、もう1点は、この12月の編集委員会の際に、先ほどちょっと
自然班のときに触れましたように、おおむねの枠の6通りのお話もちよ
とさせてもらった方がいいかなんてそう思っています。出し方の問題だとか、
そういうのもちょっと簡条書きにしてお出ししたほうがいいのかなとい
うことも考えています。

橘田委員長

早いところは、ひとつ見本を見せていただくといいね。

事務局（浅野副主幹） はい、できればそういった形でお出しできればと考えております。

事務局（能城課長） 自然班ともあったんですけど、お出しするとそれに縛られたりこだわられちゃうので、これじゃあ、どうのこうのとかって批判が出て、それもあったんですね。

橘田委員長 批判は出ていいんじゃないですか。別に、また直していけばいいと思います。

事務局（能城課長） まあ、あるとそう良い結果へ繋がれば良いですが。

橘田委員長 はい、12月の編集会議でね。

藤平委員 でも、話を聞くと、まだ班で1回も集まったことがないというところは大変じゃないでしょうか。

橘田委員長 そうですね。

事務局（能城課長） というのは、お願いした方の中には、こういう内容を書きいただければいいという方もいるものですから、いろいろな条件があるので、一堂に会することがなかなか難しいということが、初めからそれをご承知でやっているのです。だから、中心になって動ける人間は3～4人で、そのほかにこの部分のこういう内容をという指定をして執筆だけお願いする人もいます。

藤平委員 そうですか、分かりました。

橘田委員長 はい、他にご意見ございますか。
時間が過ぎてしまいましたけれども、意見がなければ、本日の第2回の編集委員会を以上で終わりにしたいと思います。よろしいですか。
それでは、どうも本当にご苦労さまでございました。第2回木更津市史編集委員会の本日の日程を終了をいたします。ご苦労さまでございました。

一同 ありがとうございます。事務局（副主幹） 以上を持ちまして、平成22年度第1回木更津市史編集委員会を終了させていただきます。お疲れさまでした。

平成22年9月22日

議事録署名人 木更津市史編集委員会

委員長 橋田 昭雄